

アーティストインタビュー
金野むつ江さん

—子ども時代からのお話を聞かせていただけますか。

金野：子どもの時は、すごい元気な子どもだったと思います。幼稚園時代の私を知ってる幼なじみが、この年齢になってから言うんだけど、「あんた、いつもなんかはりきってる女の子だったよ」って言われて。あーやっぱりな。昔からそうだったんだなって思って。とっても元気だったと思います。

—昔からそういう劇とか。

金野：そうですね。幼稚園の頃からすごいおしゃべりだったと思うし、人の喧嘩に混ざって行って、男の子にいじめられてる女の子とか見ると、なんか加勢して、口で負かしたりとか（笑）。そんなようなことをやってた覚えがあって。とにかくしゃべるのが好きだったんじゃないですかね。

小学校1年の時に、学芸会って当時、今もあんのかな？それで劇のほうに私が参加するはずだったのに、お稽古の初日に先生が間違えて合奏のほうに振り分けちゃったっていう出来事がある。その頃からそういう芝居っぽいものにたぶん興味があったんだと思うんですけど。「ああ、劇に出たいな。どんな劇やるんだろう」って思ってわくわくしてたのに、いきなり「ハーモニカのほうにいこうね」って言われて、「先生、それ間違ってます」って自分で言えないんですよ。口がへらへら言ってる割に肝心なことが言えない。それで、えーってハーモニカのほうにいったら、私の一番仲良かったお友だちが劇の方の主演になっちゃって。それを見たとき、もう悔しくて悔しくてしょうがないんですよ。もう、本当に。劇って、あんななんかかわいいお洋服着たり、いっぱい人の前に出て台詞を語ったりとか、自分の本当の現実とはまた違う物語を生きてるっていうことに衝撃を受けて。それが元々のスタートっていうか。悔しさとうらやましさだよ。自分もいつか学芸会の舞台に立って、劇っていうものやってみたいなってずっと思っていましたから。その念願叶うのがやっと4年生ぐらいになってから舞台に立つんですけどね。身体がちっちゃいので、子どもとか赤ちゃんとかの役しか回ってきませんでした。そんなのが私の幼い頃の演劇人生でしたね。

—子どもの頃から結構、将来的にもそういうふうにやってみたいなっていう。

金野：たぶんなんかね、あったんでしょうね、きっとね。人前に出たいとか自分を表現したいとか、そういう思いがすごい強かったんだと思いますよね。

—中高の演劇部、コンクールとかもあったのかなと思うんですけど、どういうことをされていたのか。

金野：コンクールは高校の演劇コンクールですよ。それまでも中学校やなんかでも夢中になってやってたけど。高校の演劇部入って、初めてコンクールっていうのがあるんだって、すっごいしゃかりきになってやったの覚えてますね。私、常盤木の演劇部だったので。それで、私たちの代で初めて宮城大会っていうのかな、それを突破して東北大会まで進出した最初の世代だったんですよ。で、そのあと、後輩に丹野久美子ちゃんがいるんですけど、久美ちゃんなんか、私たちの代よりもうちょっと越えたかな、コンクールでは。

—高校時代は結構演劇。

金野：もう、演劇一色ですよ。で、体調悪くて学校休んでるのに、クラブの時間になると（笑）、ちゃんと出てきて稽古してるんですよ。先生に見つかっちゃって、「なんだお前、金野、昼間いねがったのに、なんだお前、こんな時間になってクラブやってんだ」って言われて。そんな感じで、演劇だけはね、手抜かないっていうか、勉強そっちのけだよ。

—じゃ、そのあとに、専門に入って、東京に行ってみたいな。

金野：専門学校入学して、私は広告美術関係、フリーハンドのレタリングとか、そっちのほうだったんですけども。そういうのを1年間勉強しながら在仙の劇団の、今の劇団麦ですね、昔、劇研麦って言ったんですけど、そこに18歳で入団して。で、専門学校で勉強しながら、そういう地元の劇団で頑張ってるうちに、赤テントとか黒テントとかもうすごく勢いがあった時代だったので。たまたま最初に出会ったのが黒テントだったんですよ。最初に西公園に来て観ちゃったのが黒テントで、それ観てから、私、もう絶対この劇団に行って舞台に立ちたいって思ってた。二十歳かそれぐらいですかね。麦のほうの公演で、その時は井上ひさしさんの『日本人のへそ』っていうお芝居をやって、その時もヘレン天津っていう主役をやらせていただいたんですけど、その公演を終えて、すぐに黒テントを追って。黒テントってずっと日本国中をテント持ってお芝居で回るんですけど、ずっと彼らのスケジュールを調べて、今、旭川にいらんだなって、もう北海道まで追いかけて行ったんですよ。要するに合流するつもりで。いろんな仕事も劇団も全部捨てて、お友だちも。「私はもう黒テント入る！」って言って、旭川まで追いかけて行ったのはいいんですけど、向こうの黒テントの人に、「こんな旅先で女の子拾って帰るわけいらないから、僕た

ちが東京帰ったらまた出直しておいで」って言われて。

東京にそのあと行っていろいろ話をされて、じゃあやってみなさいって言われて。研究生として頑張ってみなさいっていうことだったんだけど、なんかもう、本当にすぐ嫌になっちゃって（笑）。もうね、ホームシックなんですよ。仙台から離れたら悲しくて悲しくて。私は仙台になんで大事なものをみんな捨ててしまったんだろうって。その当時は、幼いって言えば幼い、ばかですよ。東京の劇団っていうのは、食べるもんだと思ってたのよ。で、仙台で食べてる人なんかその当時いませんでしたから、みんな仕事を持ちながらやっていますよね。東京にさえ行けばなんとか食べるんじゃないかみたいな頭があつてば一瞬飛び込んだら、みんなバイトしながらやってる。食ってるってというような感じの人は何人かはいたと思うんですけど、その当時は例えば、斎藤晴彦さんとかね、清水紘治さんとか、あと新井純さんっていうのも黒テントの看板女優ですよ。そういう方なんていうのは別だったと思いますけど、ほかの人たちはみんな、仙台でやってる私とあんまり変わらないんですよ。それ見て、「えーっ」て、あ、そうだよな、東京来たからってみんなが食べてるわけじゃないじゃんとかね。その時なんか急に目覚めたっていうか、私は仙台で培ってきたものをそんなに簡単に捨てていいんだろうか、とか言うんだけど、結局ホームシックだよ。とにかく泣いて帰ってきました（笑）。

—じゃあ帰ってきてからの20代の演劇活動みたいなところ、あとお仕事とかっていうところをお聞かせいただいても。

金野：帰ってきてからは恥ずかしいさ。（笑）。麦の人たちに、すごい盛大に見送られて、仙台駅から、はつかりかな、それに乗って、青函連絡船のって、旭川まで黒テント追って行ったのに、こっそり帰ってきて（笑）。ごめんねえみたいな感じで。結局、なんだかんだってまた麦に復帰して、そこから27歳まで頑張ってたけども。その頃は専門学校出たっていうのもあって、私はそういうデザイン関係とかそっちのほうのお仕事をいろいろやりながら、でも生活の主軸はやっぱり演劇ですよ。その当時の劇研麦っていうのはもう自分にとって全てだったし、絶対的なもので。もう、日常の中心に演劇が常にあつて、何よりもそれを優先させてずっとやってきたと思います。27歳まで。

—麦さんは27歳で退団された？

金野：そうですね。その時ね、もう演劇できないんじゃないか。で、嫌になっちゃって。とにかくへこんじゃってね、しばらくもう演劇からこうやって遠のいていくのかな、でもどっかでもうちよつとやりたいと思っても、自分でやる

という頭はその頃は最初はなかったですよ。ただ面白いことに、もうその頃すでに丹野久美子ちゃん、彼女が退団してもう IQ を立ち上げていたんですね。ある意味演劇の後輩なんですけど、麦で彼女の方が辞めたの早くて、そういう意味では自分の劇団もつってというのは久美ちゃんのほうが先輩で。私それ見ながら、よく頑張ってるなって感心してたんですよ。私にはできないってなって。

でもいろいろあって麦を離れて本当にへこんで、もうだめだって思ってた時に、私の背中を押したのは、小屋です。劇場です。もうちょっとしたきっかけで、昔 NHK の裏に、酒蔵を利用した設計事務所さんが入ってる場所があって、そこで私の知り合いがたまたまライブをやったのを見に行くと、その酒蔵の空間に身を置いた時に、「ああ、ここだったら、私もう 1 回立ち上がれるんじゃないか。この空間だったら私ものにできるな」って思ってた。で、その蔵でやる芝居を自分で書いて。劇団も、立ち上げるっていうか、結局私はスタートは 1 人でしたから。いろいろお手伝いを頼んだりとか演劇部の後輩に手伝ってもらって出演してもらったりとか。あと、かつて麦の主宰だった松本三弥先生にも顧問として関わっていただいて。初期の頃は、松本先生に演出してもらって私の作品を創っていくっていうスタイルでずっと長くやってたんですけども。とにかくその小屋に出会わなければ、ずっとへこんだまま、演劇が遠いものになっていたかもしれませんね。

—それが 20 代の後半ぐらい。

金野：そうですね、27 ですね。それは大きいターニングポイントですよ、自分にとって。

—なぜ演劇に魅せられてしまったというか、なんで自分は演劇を手放さないんだと思いますか？

金野：なんででしょうね。あえて言えば、いろんな言葉いっぱいあるんだと思うんですけど、たぶん生まれた時から、もう魂がそうなたとしか思えないですね。そこにしか向かっていけない自分っていうのがいて。例えばいろんな状況で芝居の現場から離れざるを得ない状態になっても、なんかそれに類すること、日常の中でやっちゃうんですよ。で、たぶん人前で表現したいとか、そういう思いがすごく強く自分の中にあるんだと思うんですね。もう自分っていうものがそういうふうにはかできあがってないとか言いようがないかな。これ芝居が好きとかそういうレベルじゃないよね。好きだったとかそういうんじゃないな。嫌いだったこともあるし、本当に嫌になって逃げようと思うようなこともあるし。ただもう、そういうふうにはかできあがってるんじゃないですかね。